

高田早苗と国語国字改良論争

小川 誉子美

はじめに

高田早苗（1860～1938）は、政治学者、立憲政治家、言論人として明治から昭和初期を駆け抜けた人物であり、功績については多方面から研究が行われてきた。また当時知識人の中で展開されていた国語国字改良論争においても高田は明確な立場を貫いていたが、それに注目した報告は見当たらない。そこで、本稿では、国語国字改良論争における高田早苗の言説を紹介しその特徴について論じたい [1]。



高田早苗 [3]

1. 略歴と英語

高田は、東京専門学校設立に参画した一人であり、その足跡については、『早稲田大学百年史』『早稲田大学史紀要』ほかに多数の報告がある。彼は、1882年（明治15年）東京大学文学部を卒業後 [2]、22歳の若さで東京専門学校創設に加わり、小野梓らとともに大隈重信を支え、運営の中心にいた。その後、読売新聞主筆（1886）、早稲田大学初代学長（1902）、文部大臣（1915）、貴族院議員（1915）をつとめ、政治学者、立憲政治家、言論人、そして教育者として近代日本の新しい地平を開拓した。彼の初期のキャリアは、英語とは切っても切り離せない関係にあった。1873年、東京神田の共立中学で本格的に英語を学びはじめ、東京英語学校では英語を学びながら東京大学予備門に入る準備をした。進文学舎では英語を教え、開成学校（予備門）そして東京大学へと進む。

当時の東京大学の教員はほとんどが外国人で、西洋の書を教科書とし、英語を使用して講義が行われた。彼の自伝『半峰の昔ばなし』によると、「教場内に在っては〈日本語禁制〉のようであった」といい、当初の日本人の教員は、外山正一のほか、矢田部良吉（植物学）山川健二郎（物理学）の三人がいた。日本人教員も、英語の教科書を用い、外山の授業では、「正則的に英語の読書力を養成できた」という。当の高等教育での勉学は、外国語に通曉していることが必須条件だったのである。若いころから、バイロン、スウィフト、シェークスピアなど外国文学に親しんできた高田は、自身の英語力には「自信があった」と回想する。13歳から英語を習い、大学では西洋の書物を用いてお雇い外国人から近代学問を学び、英文学にも親しんでいた高田は、その後言語の問題に対しどのように向き合っていたのだろうか。

2. 東京専門学校と「学の独立」

東京専門学校の建学精神の一つに「学の独立」がある。これは、学問が政治勢力や時勢に左右されないことと、外国の学問のみに依存した状況からの脱却を理想とするものであった。後者に関し、小野梓は1882年（明治15年）に行われた開講式の演説で次のように述べている。

外国の文書言語によって我が子弟を教育し、之に依るにあらざれば高尚の学科を教授すること能はざるが如き、又是れ学者講学の障礙を為すものにして、学問の独立を図る所以にあらざるを知るなり。…而して本校の邦語を以て専門の学科を教授し、漸く子弟講学の便を得せしめんと欲するが如き、蓋し其責を尽すの一ならん。…原書を授くるや、これを独逸に取らず、之を仏蘭西に取らず、却って之を英語に取るものは、偶然の事にあらざるべし。…人民自治の精神を涵養し其活発の気性を発揚するものに至ては、勢い英国人種の気風を押さざるを得ず。（松本1977）[4]

西洋書を用いて英語で学問を修めてきた高田も、回想録では「今度早稲田で学校を開くとすれば、翻訳的であっても構わないから、日本語で講義して学生に記させてそれがまとまったならば訂正して、教科書を作り、どこまでも日本語でやってのけたい」と記している。

しかし、「外国の文書言語」からの脱却は容易なことではなかった。東京専門学校は、1882年（明治15年）に政治学科、法律学科、理学科、英学科を擁して出発した。やがて、政学部、法学部、英学部にあらため、1887年（明治20年）には、政学部、法学部は英語で教授する英語政治科、英語第一法律科（司法科）、英語第二法律科（行政科）と学科名にも「英語」を明記するようになった。高田が政治経済学科講師として初年度に担当した科目は、貨幣論、欧米史、憲法史、英国行政法、外交論など、イギリスの学者らによる西洋書をもとに西

洋の制度や歴史を紹介するものであった。実学を講じる一方で、シェークスピアなどのイギリス文学も教えている。ちなみに、シェークスピアの戯曲を上演したり、全集を刊行したりするなど英文学者として知られる坪内逍遙は、友人の高田の勧めにより文学の道に入ったという。

「邦語による教育」の必要性を説く者は他にもいた。東京専門学校創設の3年前の1879年（明治12年）に、当時文部少輔をつとめていた神田孝平[5]が「邦語ヲ以テ教授スル大ニテ設置スヘキ説」を発表した。要約すると、我が国では大中小の教育制度であるが、大学では専ら洋書を用い小中校では日本語を用いているため其の実は大に性質を異にする。学制が施行されて8年がたち、卒業生が増えたが、中には更に高尚の学科への進学を願う者もいる。彼らの進学先がないという現状は川を渡りたくても船がないことを嘆くようなもの、これでは文運を興起することはできない。また、法学や経済学、建築学、文章学を外国語で解釈できても日本の状況に通曉していなければそれらを役に立てることはできない。ただ、洋語大学は必要であり、外国の知識を伝授する学校は更なる興隆が望まれる。このように、神田は、外国人講師による、外国語による学問は必要であり、洋学校の更なる興隆を願いつつ、現実の学制において、中学卒業生の受け皿として、進学先の大学でも邦語で教授する学校の創設が急務と考えていた。しかし、外国の文書言語からの脱却、すなわち、西洋語に頼らない教育への切り替えは、東京大学においても容易ではなかったようである。

日本語英語化論争（後述）の先鞭を切った森有礼は、「帝国大学教官に対する演説」（1888年、明治21年）において「今日に於いては外国語を以て教授するを常とする習慣なり、外国語を以て教授するは止を得ることなり、後来と雖も永続することならん、然るに此外国語を以て教授するの利害得喪に至っては実に困難なる問題なり」と述べている。森有礼は、明治5年に

英語国語化論の先鞭を切った人物として位置づけられているが、15年後に東京大学が英語を教授言語としている状況を「止むを得ない」とし、これが将来も続いてはならないと、当時とは異なる見解を示している。

3. 国語国字改良論争の中で

高田は、1885年（明治18年）に、「英語ヲモッテ日本ノ邦語トナス可キノ説」（『中央学術雑誌』第10号）を発表した。東京専門学校（現慶応義塾大学）の教壇に立ち始めてから3年後のことである。要約すると次のようである。

言語改革を主張するのは、日本の言語のみを改革するためというより、世界の言語の一つにすることを目的とする。日本がその先鞭を切るのである。世界の言語の一つにすることで得られる利益は枚挙に暇ないが、特に外交、学術、交易においては大きい。それには英語がふさわしい。英語は、「他の語に比して其質美なり其精神好し其既に用いらるる範囲や広し」という特徴があり、詩風にも適す。その理由として、バイロンやシェークスピアの詩の例を挙げる。また、自分は祖先の言語や敷島の和歌を愛さない者ではない、3000年の歴史のある言語を捨てるのは忍びないが「余は忍び難きを忍びて国家の利便と宇内の鴻益とを謀らんと欲するなり…我が国固有の文字の如きは之を専門家の手に委せて以て蓄えるを得ん」とし、最後に「我国終に純然たる英語国となるに至る可きなり」後日詳細な実行方法を思案すると締めくくっている。

高田は、立憲改進黨系の学習結社横浜講学会においても、同様の「英語ヲモッテ日本ノ邦語トナス可キノ説」や「洋行論」などのテーマで講演を行った。同会の記録を要約すれば〔6〕、日本が欧米の文明社会に追いつくには学問の普及が不可欠である。この点、海外の窓口である横浜の人々の責任は重いが、学問の重要性が理解されていない。このため、高田らに講演を依頼した

ところ大きな成果があったとのこと、実際参加者の一人高野房太郎は渡米し、後に労働組合運動の先駆者として知られるようになる。

当時国語国字改良論争は、初期の山場を迎えていた。1872年（明治5年）には、森有礼が簡易英語を以て漢文に替えるためにイェール大学のホイットニー教授に協力を依頼、1874年には、思想家西周が「洋字ヲモッテ国語ヲ書スルノ論」（『明六雑誌1号』）でローマ字専用論を主張、1884年には、東京大学教授の外山正一が「漢字を廢し英語を熾烈に興すは今日の急務なり」（『東洋學文藝雑誌』）と漢字全廃を主張するなど、社会的に影響を持つ人々によって口火が切られていた。高田が立場を表明した1885年には、外山正一が「羅馬字会」を結成していた。賛否が渦巻く中、高田は英語国語化論を表明していたのである。

4. 東京専門学校関係者の主張

東京専門学校設立時の関係者の中には、国語国字問題に関する立場を表明していた者が他にもいる。創設者の大隈重信は、ローマ字ひろめ会の初代名誉会頭を務め、次のように主張していた。

文字は符牒でその符牒を覚えるのに苦勞するのは馬鹿な話だ。羅馬字が便利か便利でないかは最早論ずるまでもないこと…法律法令は羅馬字で脇に書いておけば羅馬字を国民全体に馴れさせる手段になる、何故に吾輩は現時の教育家が想いをここに致さぬかを怪しむものである…現在内閣は西園寺侯がローマ字ひろめ会の会頭で林董伯が副会頭で、政府の役人にも賛成者が多いから、今こそ羅馬字採用の方針を定めるに最も好い時であると考へる、而して大なる部分は勅令で行き小なる部分は文部省令で行けば雑作もなく羅馬字の日本が出来るのである。

（「羅馬字実践策、勅令で行けば」1912年7月10日 東京朝日新聞）

ちなみに、この記事より半世紀近くさかのぼるが、大隈重信の外交手腕に関するエピソードがある。当時、西洋との外交に馴れない新政府に対し、英国公使ハリー・パークスが、長崎大浦の隠れキリシタン弾圧問題に厳しい抗議をしてきた際、対応したのは大隈であった。彼は、オランダ系アメリカ人宣教師フルベッキから英学を学び、キリスト教をめぐる戦争の歴史についての知識を得ていた。こうした知識に助けられながら、パークスと激しい舌戦を繰り広げ手腕を発揮した。以降、困難な案件に次々に取り組み、この後、大隈は外国官副知事（現外務次官相当）に就任し、中央政府に任用されていくが、政変で下野、1882年に東京専門学校を創立したのである。

草創期の東京専門学校には、国語国字改良論争の歴史に名を刻む人物がいる。大隈重信が率いる立憲改進黨に入り、東京専門学校の第二校長となった前島密 [7] である。前島は、郵便制度視察のため英国に渡り、帰国後は、郵便制度をはじめ、近代日本の諸制度の確立に貢献したことで知られる。日本人が外国へ手紙を出すことができるようになったのは、この郵便制度の確立によるものであると考えれば、前島は近代の国際コミュニケーションの創始者であるといえよう。彼は、幕臣時代、翻訳筆記方に仕出していたとき、徳川慶喜に漢字廃止の儀を建白し、仮名文字採用論を主張したことで知られる。短い期間ではあったが、「ひらがなしんぶん」（1873～74）を発刊し、自らの主張を実践していた。近代化のため教育を普及するには、文字の習得にかける時間を減らし、欧米にならい平易な文字であらわすことが必要であると考えていたのである。

5. 文部大臣高田早苗の主張

国語国字改良論争は、自由民権運動の一形態として発展し、明治政府の条約改定問題を控えて欧化主義思想が支配的な中で興隆した。高田が日本語英語化論を発表した1885年は、その最中であった。ところが、1887年（明治20年）、欧化政策が失敗、1889年には大日本帝国憲法が公布され、1890年に帝国会議が開催された。国語国字改革運動は、民権運動の弾圧、欧化主義への反動やナショナリズムの高揚などにより失速した時期もあり、当時の社会機運の影響を受けながら盛衰を繰り返した。

その後、高田の立場が確認される資料は、教育調査会に提出された「国語文字改善に関する建議案」である。高田は1915年に、第二次大隈内閣の文部大臣に就任していた。この建議案の趣旨は「わが国の学生は言語文字のために過重な負担を与えられ学力の進歩が不十分であるから、言語問題を改良する必要がある」というものであり、方針、実行については次のとおりである。

（甲）方針として、「国語を整理してこれを簡易にするがため実用文体は口語文に一定し日用文字としてローマ字を採用し他の各種文体および仮名漢字は之を古典及び趣味用として保存する事とす」

（乙）実行として、四項目のうち、「三、ローマ字採用の準備且つ其の実験的研究のため左の如き諸事項を実行する事」、その四事項のうち「ハ、ローマ字を以て完全なる日本歴史辞書を編纂し又重要なる典籍をローマ字に書き直す事」

この建議案はローマ字採用論である。あわせて、国語調査事業の再開がはかれるが、これには、「文部大臣であった高田早苗の意向が強く反映したと思われる」

（『国語施策百年史』文化庁2005年）という。さらに、その立場は「国字国文改良の急務」という記事において明確に示された [8]。

日本人とヨーロッパ、アメリカ人との間には絶えず貿易交通の上に置いて相接触しているにも関わらず、日本及び日本民族の真相なるものが彼らに理解されていないというのは…国語国字の罪である。…それに国内についてみても、日本の子供、日本の青年は、此の漢字教育のために莫大な損失を招いて居るのである。国家を真に偉大なる、真に荣誉ある地位に置こうと望むならば、まず、此の根本の問題である国語国語の改善に着手しなければならぬ。吾輩は元来ローマ字採用に大賛成である…国語国語の調査をして、過去における日本文化の根本たる漢文学を保存すると同時に文字の改良に手を付けたい（傍点筆者）と思い、最近文部省内に国語国語の調査部なるものを設けて此の方の改善に一步を進めたいと考えている…吾輩は昨春欧米を漫遊して一層明らかに日本の真相を彼らに理解させる必要を感じたと同時に、かの地における教育の実情を視察して、また我が国語改善の必要に思い至ったのである。戦争に強いばかりが国民としての能でもあるまい、今後の日本国民は文学、宗教、工芸、美術の上においても、また優に卓越した地歩を獲得しなければならない。文字の改良国語の改良は、実に今日日本の一大急務である。（「国語国文改良の急務」1916年1月1日 東京朝日新聞）

1900年以降、ローマ字運動が再興し、団体の設立や機関誌の発行に加え、文学者たちがローマ字による短編小説や詩集、日記などを、科学者たちがローマ字を使って専門書を著した。東京では町名をローマ字と漢字で記した札が町に立てられたり広告がローマ字で記されたりしていた。ローマ字団体においては、日本式かへボン式かの問題、分ち書きの問題など表記法に関する議論も展開され、ローマ字運動があらたな段階を迎えた時代であった。高田の立場は

一貫していたが、具体的な方向性については不明である。

6. まとめ：国語国字改良論者として

当時、文化的影響力を持った人々が多大なる熱量を以て国語国字改良論争に関わった。主張の趣旨や活動の詳細については、多くの研究が報告されてきたが、高田についてこれまで具体的な論考などは報告されてこなかった。資料が限定されているため、推測の域を出ないが、最後に、高田と当時の活動家との相違点などを中心にまとめたいと思う。

6-1. 相違点

国語国字改良論争は、表音文字の合理性に出会い、日本の遅れは文字の数や文体の複雑さにあると痛感し、新制度や教育を普及するには、習得に時間のかかる漢字より、表音文字、なかでも、西洋との交流にはローマ字が便利だという考えが根底にあった。運動家の中には、そうした想いを実践に移した者もいる。前島密は、漢字を使わずひらがなのみを用いた「まいにちひらがなはんぶん」（1873）を創刊した。科学者の中にも漢字を用いずひらがなやローマ字で著書を刊行した者がいる。清水卯三郎はイギリスの化学入門書を訳しひらがなを用いて『ものわりのはしご』（1874）を著した。物理学者の田丸卓郎は「Sindô」（1912）を、同じく物理学者の寺田寅彦は「Umino Buturigaku」（1913）を、生物学者の池野成一郎は、「Zikken Idengaku」（1913）など、それぞれの主張するローマ字表記法を用いて専門書を刊行した。

一方、明治期の日本語は、西洋から移入した新たな概念を日本語に翻訳する際に漢語を用いたことにより、和製漢語が飛躍的に増大した。しかし、読み書きの難しい漢字を用いることは科学知識の習得や普及に障害になると新概念を和語で表す者もいた。前述の清水卯三郎はその一人である。さらに、読み書きの負担軽減のための方策とし

て、漢字節減、かな文字の専用、ローマ字採用以外に、日本新字やひので字など新国字を創造する人々も現れた。

このように、国語国字改良論争は、百花斉放領域を超えて広がり、熱心に改良案が模索されていった。特に、近代学問を応用し、諸方面で新制度の普及を試みる者たちは、書記体系にも合理性を求め、その改善を焦眉の急務と考え自ら実践していったのである。

専門書や文学を多数翻訳していた高田であるが、それをローマ字で記すなど実践に関する記録はない。

6-2. 小括

ローマ字運動の牽引者であり物理学者の田中館愛橘は、多岐にわたる研究を行い、新概念や新制度の普及を試みた。特に国際化のために「世界と同じ合理的な物差し」としてメートル法の浸透と普及に大きな尽力をした。「メートル法に次いで解決を要するのは、国字改革であり世界に日本語を広めるには、世界の文字なるローマ字でなければかどらぬ」と力説したという。

田中館が腐心した度量衡は、間、尺、寸、升、坪などの単位が現在も一部で使用されているが、メートル法はすっかり定着した。近代化、国際化の名のもとで、欧米にならった多くの新制度が定められ、社会の骨格を形作り今日に至っている。しかし、漢字と「国際文字」ローマ字の問題は、多くの知識人たちの熱い議論にも関わらず、主張の方向には至らなかった。

高田も、立憲政治家であり教育者という立場から、国民に広く、憲法や立憲政治を理解させることを重視していたにちがいない。読売新聞の主筆を務めたときも、平易な文体と内容で世の中の仕組みを迅速にわかりやすく伝えようとした。それにはより平易な書記体系への変革が急務だと考えたのであろう。

高田は文部大臣を務めていた当時「日本文化の根本たる漢文学を保存すると同時に文字の改良に手を付けたい」（前掲）と述べていた。彼は、漢文学の保存とローマ字採用の両立という視点から、どのような具体案をあたためていたのだろうか。

最後に早稲田大学に話を戻したい。1916年、早稲田ローマ字会が発足した。当初の目的は日本式ローマ字書きを広めることであつたが、その後ローマ字を将来の国字にすることを目的とするようになり、Rômazi no Waseda (1935)、大隈重信の「文字の維新革命」(1937)、「国民のローマ字読本」(1938)などを刊行した。当時は「早稲田の主な先生がたは、たいがい、ローマ字論者で(…)日本の国字はローマ字になるのがあたりまえだ」(岡野篤信他『ローマ字50年—過去・現在・未来』)という雰囲気があったという。この早稲田のローマ字論者たちの間では、高田が述べていた漢文学の保存とローマ字採用の両立についてどのような議論がなされていたのだろうか。

何よりも注目すべきは、1930年に早稲田大学にローマ字書き日本語による学位論文が提出され、工学博士号が授与されたことである[9]。1885年の高田の主張から45年を経てからのことである。晩年の高田が、この事実をどのような想いで受け止めたか、想像に難くない。

(おがわよしみ 横浜国立大学教授
博士〈政策・メディア〉)

●注●

- [1] 筆者が高田早苗に関心を持ったのは、我が家に義祖父に贈られた「福寿」と書かれた書があり、贈り主が半峰(高田早苗の雅号)と記されていたことがきっかけである。義祖父小川直照(1881~1954)は東京専門学校時代に

高田早苗から学んだ。高田は趣味人であり美術を愛好していた。なお、現在早稲田大学の早稲田キャンパスの図書館は高田早苗記念研究図書館と称され、大隈重信の銅像のわきに彼の銅像が並ぶ。

- [2] 東京大学の名称は帝国大学、東京帝国大学など何度か変わったが本稿では東京大学と記す。
- [3] 早稲田大学ホームページから
<https://www.waseda.jp/top/news/68190>
- [4] 直接引用する際、タイトル以外、カタカナはひらがなで表記する。
- [5] 洋学者、官僚、思想家として知られる。言語に関するこのほかの著述は見当たらない。
- [6] 横浜での講演記録『二村一夫著作集』
<http://nimura-laborhistory.jp/index.html>
 (2024年6月1日閲覧)より。
- [7] 前島は高田の岳父である。
- [8] 高田は文部大臣に就任する前年に欧州に教育視察に出かけた。
- [9] 茅島(2012: v)による。このローマ字書き博士論文は、永雄節郎による“Niyaku no Kikai”(荷役の機械)。彼にはこのほかローマ字で記した著書や論文、ローマ字会から出版した著書もある。

■参考文献■

- 岡田寛士(2022)『早稲田に青山白雲あり—早稲田大学の自由独立精神と進取独創』22世紀アート
- 岡野篤信他(1988)『ローマ字50年—過去・現在・未来』ローマ字文化を考える会
- 茅島篤[編](2012)『日本語表記の新地平—漢字の未来・ローマ字の可能性』くろしお出版
- 神田孝平(1879)「邦語ヲ以テ教授スル大
 学校ヲ設置スベキ説」川澄哲夫[編]
 (1978)『資料日本英学史2 英学教育論争史』大修館書店

杉山滋郎(2008)「科学者たちの選択→ローマ字運動の歴史が科学技術コミュニケーションに示唆するもの」『科学技術コミュニケーション3号』北海道大学科学技術コミュニケーション—養成ユニット

高田早苗(1885)「英語ヲ以テ日本の邦語ト為ス可キノ説」川澄哲夫[編](1978)『資料日本英学史2 英学教育論争史』大修館書店

高田早苗(1927)『半峰昔ばなし』早稲田大学出版部

文化庁(2005)『国語施策百年史』文化庁

細野浩二(1971)「東京専門学校と邦語教授」『早稲田大学史紀要4号』早稲田大学歴史館

松本康正(1977)「東京専門学校で教えた16人の外国人講師たち」『早稲田大学史紀要10号』早稲田大学歴史館

真辺将之(2010)『東京専門学校の研究:学問の独立』の具体相と「早稲田憲法草案」』早稲田大学出版部

森有礼(1888)「帝国大学教官ニ対スル演説」川澄哲夫[編](1978)『資料日本英学史2 英学教育論争史』大修館書店

早稲田大学大学史資料センター[編]
 (2002)『高田早苗の総合的研究—早稲田大 創立125周年記念』早稲田大学大学史資料センター

【謝辞】

酒井美栄子氏、渡辺公利先生(修猷館高等学校)には小川直熙に関する大部の貴重な資料をお譲りいただきました。茅島篤先生には重要なお助言をいただきました。心より感謝申し上げます。